スカイノーツ

詩篇ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スカイノーツ

【Ｎコード】
Ｎ９６５１ＢＫ

【作者名】
詩篇ナオ

【あらすじ】
ある日自宅に届いた、謎の宅配物。
おそるおそる開けてみると、中にはいっていたのは、大量のプチプチシートと赤いペンだった!?

序章　始まりはいつも突然に

してはいけないというものはこの世にはたくさんある。
例をあげるのならば、塩素系洗剤と酸性洗剤を混ぜたりや、洞窟の中でたき火をしたり、知らないおじちゃんについて行ったり……とにかく挙げていったらきりがない。
大通瑠衣は、そんな『してはいけない』ことをしようとしていた。

◇

「さて、これはどうしたものですかな」
瑠衣の目の前には、文庫本くらいの段ボール。厚さは、１０センチ前後。
そして、貼り付けられている伝票の宛先には、大通瑠衣と書かれている。住所ももちろん、大通家の住所になっている。しかし、差出元は全くの不明。
「なんでお母さんは、こんなものうけとるのかなぁ……」
――開けてはいけないよね。
もしかしたら、爆弾かもしれない。開けたら猛毒がでてくるかもしれない。
瑠衣は、段ボールの前で少し唸った。そして、顔をあげる。
「でも、もしかしたら何かの景品という可能性もあるわけだし」
好奇心に負けペン立てに入れてあったカッターで、テープを切り段ボールをおそるおそる開ける。
そこで、いきなり光って爆発なんてことは無かった。
開けて、まず目に入ったのは気泡緩衝材、そしてそれに包まれるように梱包されている
「何……これ？　ペン？」
赤いペンが入っていた。蓋式のペンだった。

そして、ペンの下には、小冊子くらいの厚さの取扱説明書が入っている。手に取ってみる。まず目についたのは表紙に『当選おめでとうございます』とゴシック文字で大きく書かれていた。

――なんの懸賞？

瑠依は、必死で頭をひねって思い出そうとするが、脳の容量が少ない瑠衣は、思い出せるわけがないとすぐに思い出すのをあきらめた。

思い出すのをあきらめた、瑠衣は表紙をめくる。

そして驚愕する。そこには、びっしりと小さい字でページが埋め尽くされていたのだ。パラパラと、一通りページをめくる。

そして、深呼吸をしてから、

「分かる訳ないでしょ！　馬鹿をなめないでよね！」

意味の分からないセリフを叫びながら、瑠衣は小冊子を床に叩きつけた。

「臭いものには蓋をする！　そして、封印！」

段ボールの中にペンと説明書を戻し、押し入れの中にぶち込んだ。

そして、この日謎の段ボールが開くことはなかった。

序章　始まりはいつも突然に（後書き）

まだ始まりの始まりですので、よろしくお願いします

いつもの日常、違う日常（前書き）

間違えて、しんきでしてしまいました
序章の続きです

いつもの日常、違う日常

「どうしたの、瑠衣(るい)ちゃん？元気ないね」
「うん、まぁ昨日なんか色々たくさんあって。はぁ……」
県立柳川高校。柳川沿いに立つ進学校。
創立数十年とまだ日の浅い高校だが、モダンな校舎や有名デザイナーがデザインした制服が、反響を呼び中堅の進学校なのに毎年高い倍率になっている高校である。
そんな、おしゃれな高校にはとても似合わない深いため息が、瑠衣の口からもれた。
「そんな、深いため息するほど、大変なことがあったの？」
「うん、まぁね。でも、みやちゃんがいつも体験していることよりは、大変じゃないよ」
「も、もう！瑠衣ちゃんまで、私を生徒会長として見てるの？そうじゃないって思ってたのに！」
瑠衣の目の前に座る、流れる黒髪、大きい瞳など人形のような少女、町路都(まちみちみやこ)が頬を膨らませる。
「だって、ダントツの支持率で生徒会長になられた町路都様だよ。それは、私なんかが話していい相手なんかではないですよ。」
瑠衣は、笑いながら話すと、都はさらにふくれっ面になる。
「る・い・ちゃん？」
「嘘だって。嘘だよ。いや、ホントごめんね？」
少し、都が怒りかけていると察した瑠衣は、やりすぎたと思い謝る。
「別に怒って無いからいいよ。ところで、昨日何があったの？」
今度は、興味深々とばかりに、都は体を乗り上げ瑠衣を見つめる。
瑠衣は、苦笑いを浮かべつつ参ったとばかりに二度目のため息をつき、しぶしぶ話し出す。
「私がする話を笑わない？」

うん。と頭を縦に振る都。
「絶対に？」
もう一度縦に振る。その眼は、『前置きはいいから、はよはじめろ』と言ってるようにも見える。
「実は昨日ね……」
話し始めようとしたとき、授業開始のチャイムが鳴る。
「ごめんねー。この話、昼休みでするから」
「る・い・ちゃん！」
ぷいと、都は体を白板のほうに向けた。

◇

昼休み。それは、小・中・高校生だれでもうれしい至福の時。
勿論、瑠衣と都もいつもならば、心休まるひと時なのだが、瑠衣は来てほしくなかったと天井を見つめ、都は興奮を抑えきれないのかそわそわしている。
今は、机をくっつけ弁当を広げているが、二人とも弁当に手をまったく付けていない。
向かい合ったまま沈黙したままだったが、遂にそわそわした感じで都が口火を切った。
「で、昨日何があったの？」
「うん、実は昨日ね……」
と、瑠衣は昨日あったことを大まかに話した。そしたら、そわそわして聞いてた都の顔が、瑠衣の話を聞いているうちにどんどん青ざめていく。
予想外の反応に瑠衣は、少しためらう。
――もしかして私の話ありえないほどくだらなかった？
実際くだらない眉唾な話だが……都の反応は白けたとは違う反応だった。
またも沈黙が訪れたが、都が重々しく話はじめる。

「瑠衣ちゃんは、そのペンで何か書いた？」
「いや、何も書いてないけどどうして？」
「ならいいけど。もしかして取扱説明書を見たりした？」
「見てないよ。私が長い文字見れないのみやちゃんもしってるじゃん」
「だね。ははは」
すごく、乾いた笑い声が都の口からもれる。
都のそんな反応を見ていた瑠衣の頭は、すっかりこんがらがってた。
――え？　意味が分かんない？　なんでみやちゃんがあのペンのこと知ってるの？もう何がなんなのよ！
「瑠衣ちゃん、あのペンは絶対に使ったらダメだよ！　使ったら大変なことが起きるから。絶対だよ！」
「え、う、うん。分かった。」
不意に声をかけられた瑠衣は、思わず答えてしまった。どんな大変なことが起きるかとかを都に尋問することも忘れていた。
「ところで、瑠衣ちゃんは、昨日のドラマ見た？」
「う、うん。見たよー。宮坂大輔（みやさかだいすけ）がでてるあれでしょ？」
「そう！今週のお話面白かったよね」
「面白かった。宮坂さんが、あんたたちには一生分からない。言ったとこがすごくかっこよかった～。」
「分かる分かる。私もそこでテンションがあがちゃった。」
話題が変わり、ガールズトークをしながら、弁当をつまんでいく二人。
瑠衣の頭の中は、昨日のペンの話よりも昨日のドラマの話で頭がいっぱいで、今さっきまでの話は頭の奥底に追いやられていった。

いつもの日常、違う日常（後書き）

いつもの日常はひょんなことで崩れる。
友達の反応にも少しは気を付けていきたいと思いながら書きました

閑話休題（前書き）

少し間があきました
おかしい点があったので、一文変えました

閑話休題

放課後になり、生徒にあふれていた学校は次第に静かになっていく。
ここ、職員室にいても人気が次第になくなっていくことが分かる。
――早く帰りたいよ。
瑠衣は、職員室にある担任である先生の机の前にいた。先生に呼ばれて来たはいいが、肝心の先生が野暮用で外していると聞いたときは本気で帰ろうかと思った。
でも、隣の机にすわす先生が、瑠衣を止めるように担任から言われていたということを話したので、しかたなく帰るのを待った。
しかし、瑠衣の怒りは頂点に達しかけていた。そして、職員室にかけられた時計をみて
――よし、もう二十分は待ったから帰っても先生のせいにできる！
と、帰る決心をしたとき、
「ごめんねー。大通さん。少し資料作るのに手間取っちゃって。」
担任である、女の先生が入ってきた。その手には、Ａ４サイズの茶封筒が数枚抱えられていた。
瑠衣は思わず封筒について確かめてみる。
「先生。なんですか？その封筒」
「この封筒はね～。今から大通さんに持って行ってもらいたくて～」
「どこにですか？」
「台坂若菜（だいさかわかな）さん。」
「はい？でもなんで私？」
「だって、先生が行ってもいいけど。それじゃあ、意味がないのよね。」
「何の意味ですか？」
「クラスメートが行くことで、もしかしたら友情が芽生えて、明日には登校なんてことに……」
「なるわけないじゃん。先生、漫画かドラマの見過ぎだよ。」

瑠衣は、ため息をついた。前からこの担任は頭が弱いんじゃないかと思ったが、まさかここまで弱いとは思わなかった。

「まぁ、いいから行ってくれない？どうせ台坂さんとは同じ中学校でしょう？」

と、先生が瑠衣の横に立ち、肩に手を置く。そして、小声で

「さっさといけ。じゃないと、私の担当の授業の平常点０でだすわよ」

縦に何度も振る瑠衣。笑顔で手を振る担任。しかし、眼は笑ってない。

瑠衣は、ひきつる頬を必死にごまかしながら職員室を出るのが精いっぱいだった。

閑話休題（後書き）

短いです。
そして、簡単です。

ひきこもりな少女（前書き）

えらく日を置きました。

ご指摘等お願いします

ひきこもりな少女

瑠衣が若菜の家についたのは、職員室をでて約一時間後のことだった。時間は軽く五時を回っている。もう、冬が近いからか日がやや落ちかけあたりは薄暗くなっている。

――うう、緊張するー。私のこと覚えてくれているかなー？

高校生になって以来、ほんと数えるくらいしかあっていない、同級生の顔が浮かびあがる。

――あれ？　台坂さんだっけこの顔？

が、それが若菜かどうかは、瑠衣にはわからなかった。

◇

インターホンの前に立ち、ひとさし指でチャイムを勢いよく押す。ピンポーンとチャイムが鳴り、ワンテンポ遅れて、女の人の声が扉の向こうから聞こえる。

「はいはい。どちら様ですか？　あら、若菜の同級生？」

扉から出てきたのは、四〇くらいの女性だった。若菜の母親だ。

「あ、はい。若菜さんにプリントを渡しに来ました。若菜さんはいますか？」

「う～ん。若菜ね、いるけど、寝てるかも。起こしてくるから、少し待っててね。っと、名前はなに？」

「あ、瑠衣です。大通瑠衣」

「瑠衣ちゃんね。もし起きなかったらごめんねー」

――起きないって、一日何時間寝てるんだろう？

と、数分待つ。そして、

「若菜が、上がってきてって言ってるから、あの子の部屋に行ってくれない？時間は大丈夫？」

「あ、はい大丈夫です。すみません、お邪魔します」

瑠衣が、玄関に上がる。後ろで、扉が閉まる音がした。

◇

――なんなのここ……異次元？別世界？ぶっちゃけ気持ち悪い。

瑠衣がいるのは、若菜の部屋。そこは、とんでもない部屋になっていた。

フィギュアにポスター、その他、アニメのグッズ。本棚には、ぎゅうぎゅう詰めに詰め込まれた、漫画やライトノベルの山。

ひきこもりでニートな人の部屋のイメージをそのまま具現化したような部屋だった。実際、それなのだから笑えないのだが。

とにかく、瑠衣の頬は引きつっていた。

「ところで、プリントって何？」

くるっと、回転イスが回り顔をこっちに見せる。

肩口でまっすぐに切りそろえられた黒い髪。少し細い眼は、キレイというよりは、クールな印象を与える。

――ああ、確かにあの顔だった。たまには、私の勘も当たるのね。

ぼんやりと考えていると、

「どうしたの？」

若菜が、首を傾げながら訪ねてきた。その声で我に返った瑠衣は、戸惑いながら返事をする。

「い、いやなんでもないよ。あはは。」

「ならいいけど。ところで、プリントは？」

「ん？あぁ、これだけど」

カバンから担任から渡された封筒を全部出す。若菜は、何も言わずにそれを見ていた。

「これだけ？」

「だよ」

「そう、わかった」

と、封筒を一つ掴み取ると、中に入っていたプリントを取り出し、

中身を確認し始める。そして、ため息を一つつき、
「相変わらず、無駄な事ばかりやっているのね。時間の無駄だわ」
と、机の上に放り投げた。若菜は瑠衣に向き直って、
「こんなことしても意味がないのに、何で学校に行ってるの？」
と、聞いた。瑠衣は少し考えてから
「確かに数学とか英語は、大人になっても使うことは基本少ないと思うけど、やってて損はないし。
何より学校には、友達がいるしね。それだけにも行く理由にはなるよ」
――子供っぽい人。中学生のときから全く変わってない。
若菜は、過去の記憶と照らし合わせながら、そんなことを思った。
「台坂さんは何で、学校に来ないの？」
瑠衣が聞く。若菜が答える。
「行きたくないし、いく意味がないから。」
「そうなの。何か悲しいね。中学生の時はそんな性格じゃなかったのに」
「昔は昔、今は今。中学生の時の話はあまりしないで」
「ご、ごめん。でも、やっぱり学校は来た方がいいよ」
はぁーと若菜はため息をつく。
相も変わらずのお人好し。若菜は瑠衣に対してそんなことを思った。
もしかしたら、彼女になら話しても……と思ったが、やっぱり思いとどまる。
巻き込みたくないし、信じてくれるという可能性は１００％ではない。しかし、注意くらいはしておいた方がいいだろうと思い、瑠衣に話す。
「ところで、大通さん。あなたはスカイノーツっていう、都市伝説みたいなもの知ってる？」

ひきこもりな少女（後書き）

いよいよ、本編です。

都市伝説。

「どんな都市伝説？」
瑠衣には全く聞き覚えのないものだった。
若菜は、そんな瑠衣の心情を読み取ったのか、説明し始める。
「ある日身に覚えのない宅配物が、家に届くってもの。中には、ペンと小冊子が入っていて……どうしたの？」
「い、いやなんでもないよ……うん。続けて」
心当たりが大ありである。瑠衣の脳裏には、昨日の赤いペンが浮かんでいた。
「顔面がすごく青いけど……まぁ、続けるとそのペンは、三色あるの。赤と青と緑、その三色。で、ここからが大事なんだけど、そのペンは一回だけ空に文字が書けるの。」
「空に書くとどうなるの？」
「それで、正しいかはわからないけど、願いが一つだけかなうって。なんで、そんなにがっかりしているの？」
「いや……なんでもない」
瑠衣は心の中で肩を落とした。そんな眉唾な話を誰が信じるのか。B級ドラマよりもたちの悪いオチだ。
「変なことをはなしたね。気を悪くしたのならごめんなさい。」
と、若菜は一度話を区切り、そして口調を強めながらいう。
それは、心の底からの声。瑠衣に対する絶対のメッセージ。
「でも、これだけはきいて。もし、スカイノーツを手にすることがあったら、絶対に使おうと思わないで」

◇

若菜の家を出た瑠衣の頭の中は、いろんなものが入り混じりごちゃごちゃになっていた。

すべての現況をたどれば、すべてスカイノーツになるのだが。しかし、それを取り囲むように都や若菜の反応が瑠衣の考えをさらにごちゃごちゃにさせる。

――いったい、どうなっちゃたんだろう。もうわけが分かんない。

考えがうまくまとまらないまま、帰路に就く。

そんな瑠衣は町が騒がしくなっていることに気付かなかった。

◇

若菜は暗い部屋で一人、パソコンのディスプレイを見つめていた。流れるようにスクロール続けるディスプレイには、電子掲示板のスカイノーツスレが映っていた。

次々映し出されては消える文字を目で追い続けていた、若菜が頭を上げる。

「このスレの住人、ほんとにスカイノーツ持ってるの？」

その声には、若干の怒りと焦燥が入り混じっていた。

「間違いなく、彼女はスカイノーツを持ってる。それを、どうやって回収するかが問題なのよね」

脳裏には、瑠衣の顔が浮かんでいた。約三年ぶりに話した、お人好しな彼女。

――彼女をあの世界にまきこみたくない。

その一心が、若菜の手に勇気を与えた。

『スカイノーツが届いた人に。決してそのペンを使わないでください。そのペンは、人を殺します』

掲示板に書き込まれた、新たな書き込み。

――さぁ、どんだけたたかれるのかな？

若菜は、少しだけ笑った。

スカイノーツ

町がやけにうるさくなってきたなと瑠衣が感じ始めたのは、午後7時くらい。帰宅してからだいたい３０分くらい過ぎた頃だった。

母親である、大通真名《おおとおりまな》と中学二年生になる妹の香菜《かな》とともに食卓についていた時だった。

「今日は、サイレンがうるさいね。なんでかな?」

香菜が首を晩御飯である、焼き魚をつまみながらつぶやいた。

「さぁ?何か事件でもあったのかもねー。あ、瑠衣。ちょっとテレビを点けてくれない」

「リモコンそこにあるから自分でつけなよ」

「ボタンを押すのがめんどくさい。だからやって」

「仕方ないなー。もう」

真名にせかされて、テレビのスイッチを付ける。画面に映ったのはレポーターと緊迫した現場だった。

「瑠衣ねぇ。ここってさ、うちの近所だよね」

「だね。コンビニ前の公園じゃないかな?でも、かなりやばいね……これ。」

テロップには、閑静な住宅街で変死体。と書かれていた。

レポーターが現場の様子をいい終わり、スタジオにカメラが変わるころには、三人の食卓は何とも言えない雰囲気に包まれていた。

「うーん……テレビをつけたのが間違いだったかな。すっかりご飯がおいしくなくなっちゃた」

真名が笑いながら、チャンネルを変える。そこには、タレントが愉快そうに笑っていた。しかし、三人がつられて笑うということはなかった。

◇

翌朝。柳川高校3年2組教室。
朝のホームルームが始まる前の時間。瑠衣と都は昨日の事件のことについて話していた。
「で、みやちゃんは昨日の事件についてなんか知ってる？」
「昨日？うん知ってるよー。コンビニ前の公園での事件でしょ？」
「そう、それ。実際怖くない？まだ、犯人つかまってないんでしょ？」
「つかまってないね。しかも、学校が緊急の連絡をするぐらいだもんね。すごく、やばいかも」
と、苦笑いを浮かべる都。
「でもさ、もしかしたら早く帰れるってこともありえない？やっぱり、薄暗い時間に返すのも学校としては問題があるし」
「うーん。それは、ないと思うなー。せめて、部活動が禁止になることくらいかも」
「だったら、みやちゃんも早く帰れるの？」
「そうなったら、大変なんだよ。今から体育祭や引き継ぎとかいろいろやることがあるのに」
「生徒会長さまは多忙ですなー。休むことすらできないのですか。晩年暇人の私なんかとは大違い」
そうでもないけどね。と、都は苦笑いを浮かべた。
「はいはい。早く座りなさい」
担任が教室に入ってきた。雑談をしていた生徒たちが気だそうに自分の席に戻っていく。生徒全員が席に着いたのを確認し、担任は話を始める。
「みんな知っていると思うけど、昨日この近くで殺人事件がありました。それで、学校として当面の部活動の禁止ということになりました。」
瑠衣は都を見る。都は、鬼のような形相で考え事をしていた。おそらくこれからのスケジュールなどを組み立てているのだろう。
「ということですので、間違えても放課後学校に残ってはいけませ

んからねー」

担任の最後の一言で、都は「昼休みだけで終わらせろ？この学校の大人はみんな腐ってやがる……絶対のろう」と、のろいの言葉を吐き出していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9651bk/

スカイノーツ

2013年8月30日18時24分発行